

-255- 異所性骨化に対する骨シンチグラムの応用

福島医大 整形外科

○星野亮一, 渡辺秀樹, 蓮江光男,

放射線科

木田利之

異所性骨化の早期発見, 経過観察および治療時期の決定に, 骨シンチグラムは有力な検査方法のひとつである。

今回, 我々は ^{99m}Tc - 磷酸化合物を使用し, 化骨性筋炎, 一酸化炭素中毒, 脳炎後の片麻痺の3例について経時的に骨シンチグラフィーを施行し, 臨床症状, レ線学的所見, 治療および病理学的所見との関連について検討した。

骨化部位はそれぞれ, 膝関節付近, 股関節, 肘関節に見られ, RIの集積が認められた。

同一患者でも, 発症後の時期によってRIの集積は異なり, 化骨性筋炎例では骨化部の骨シンチグラムが陰性化した時点で, 骨化部の切除術を行なった。

一酸化炭素中毒例では, 経過観察約2年の間に4回の骨シンチグラフィーを行ない, RIの集積が減少した時点で股関節骨化部の一部を切除した。

脳炎による片麻痺例では, 麻痺側の肘関節に骨化と拘縮が発生し, 尺骨神経麻痺を合併したため, 骨化部の陰性化を待たずに尺骨神経前方移行の手術を行なった。骨化部には手をつけず, 術後のRI集積の増加はみられなかった。

異所性骨化3例について, それぞれの骨シンチグラム像と臨床所見, 経過, レ線所見, 組織所見について検討し, 骨シンチグラムの有用性について報告する。

-256- 四肢の麻痺と骨シンチグラム

昭和大 医 放

○菱田豊彦, 徳永宏司, 前田陽一

志村秀夫

熱海総合病院 核診

竹内方志

熱海総合病院 整

丸山俊章

^{99m}Tc - 磷酸塩による骨シンチグラムが一般化され普及してきた。全身シンチグラムによって原疾患と関係なく左右差を認めることがしばしばある。その本質的な解明は充分になされていない。

われわれは, 脳脊髄疾患で四肢が運動制限された患者約30例について, ^{99m}Tc - 磷酸塩による骨シンチグラムを行った。患側と健側のとり込みの強さを比較しX線像と対比した。

片麻痺の患者では一般的にみて患側の方がとり込みが大である。とくに肩部のとり込みの差が著明である。同一人でも肩で左右差が認められるが他の部では差がない場合もある。

麻痺側はX線写真でosteoporosisを示していることが多いが, osteoporosisの程度と Te - 磷酸塩のとり込みと直接的な関係は認められないようである。

骨の吸収過程に磷酸塩がどのように関与するかを確かめるべく, 動物実験で検索中である。